

会 報
18号



函館の歴史的風土を守る会会報
No.18 S 59. 10. 1発行
発行所 函館の歴史的風土を守る会
印刷所 双葉印刷所
電話 (0138) 53-7730

町並み保存の「中」と「外」

本 田 直 也

「町並みは、歴史的、文化的な遺産である」と言われる。その通りだと思う。しかし、「外」から見ると貴重な遺産であって、「中」に住んでいる人間にとっては、老朽化して住みごちの悪い、ただの住宅でもある。旧函館区公会堂や旧渡島支庁舎のような公共建築と違い、町並み、つまり民家を残すことは、はるかに難しいのではないだろうか。本州各地で行われている町並み保存事業で、函館で行われようとしている、明治、大正の一般民家、商家を中心としたものはひとつもない。実施にまで持ち込めれば、函館が初のケースとなるわけだ。

函館市の西部地区、とくに二十間坂から西側と、現在の旧郵便局、豊川町の一帯は、明治40年の大火で、ほとんどが焼けてしまった。今、この一帯に残る古い建物は、公会堂やハリストス正教会をはじめ、一般の民家に至るまで、大半がその焼け跡に建てられたものである。函館の市街地がその後、東へ東へと発展していったため、そのまま取り残されたような格好で、市に町並みの調査を委嘱された北大の足達富士夫教授は、明治から大正にかけての民家などが、こんなにまともに残っているのは函館だけではないか」と話していた。ただし、どの建物も建ってから6、70年を経ており、今も人が住んでいるとは言え、老朽化がかなり進んでいるところに問題がある。

今年の春、この頃の建物を使った喫茶店、民宿など十数軒を回って歩く機会があった。経営者のほとんどが、函館の3、4代目、西部地区で生まれ育った人たちだったのに驚いたが、共通した悩みは、維持、補修にかかる費用の高さだった。全面的に改修すると、同じ規模の建物を今の技術

で新築するより二倍の費用がかかるという。また、かわらやしっくい修理ができる職人が函館にいなくなり、昔の太い柱は、取り替えようと思っても、同じものはまず見つからないという。これらの喫茶店は、建物を残す—という意味では町並み保存を先取りしている—と言えるものだが、もし一般の民家を保存していくとすると、同じ悩みを、その住民や大家が抱えることになる。函館とやや似ている神戸の場合、町並みの核となる異人館だけを外観を保存する建物として指定（市が補修費の3分の2を負担）し、残りの民家は、保存区域内にあっても景観を壊さない限り建て替え自由—として住民の不便さを最少限のものとした。函館では民家が町並みを支えており、外観を保存するにしても、住民のこうむる不便さをどう解消するのか、補修の負担の割合をどうするのか、大きな課題として残ったままである。

役所が金を出す公共建築の保存と違い、町並みの保存は「外」からかけ声をかけるだけでは絶対に成功しないと思う。まず第一に、その町の「中」に住む人たちの



豊川町の古い町並み一昔、海産商通りと言れたあたり

の協力が必要ではないだろうか。4年半、函館に住んでみて、住民サイドにたった保存の議論は、あまり聞いたことがない。逆に、代々函館に住む人たちが、黙々と建物を喫茶店にするなどして残し、最近では自分の住宅（大正期のもの）を改築するにあたり、余分の金を出して外観を残す人も現

れた。西部地区の「中」で、気運は盛り上がっているように見える。今のところ「外」とは無関係に—。

（北海道新聞社 記者）



△ 「花かるた」 三代目の私

児 玉 幸 子

私が函館に嫁に来たのは、17年前の事である。主人は教員で実家が「かるた屋」として古いのれんを持つ問屋であった。

昔は使用人が何人もいて店としての全盛時代もあったそうだが、私が来た頃は家族だけで細々とした商売であった。私はサラリーマンの主人に嫁に来たのだが、児玉の家に嫁いで来た日、舅に「お前は家の嫁だから家につくせ」と云われた。

職人の家で育った私は商人の家のしきたりも理解出来ず、その感覚の古さに驚いた。一人っ子だった主人に代わって私が三代目として店ののれんを守ることを約束させられた。

家の嫁だから、主人との甘い新婚生活などなかった。主人は両親と私の板ばさみになって両方に気を使っていた。サラリーマンの女房が何んでこんな苦勞をしなくてはならないかと、心の底でいつも反撥していたし、利益の薄い商売を引き継ぐ気は毛頭なかった。

正直いって、その頃の私にはのれんだの、家だの歴史だの、そんなものどうでも良かった。主人と子供と水入らずの安息の日々が欲しかった。只そんな時でも暇があると子供を連れて、元町や西浜岸壁附近を散歩した。一番心の休まる時間でもあった。私の歴史と、西部の町並みは、だから切り離せないものがある。後になって歴風会の会員になり、その気持は益々大きくなった。

それにつれて古い歴史の重み、それに対するしがらみや執着が何となく理解出来る様になった。

姑が亡くなった後、ようやく自分の位置を確保した私は、家の中を自由に出来る事に意気込んで初代の頃からあった古い物を片ばしから投げてしまった。高度成長時代とよばれている頃である。その時主人が「今に後悔するよ」と悲しげに捨てられる物を一つ一つ手に取って見ていたのを今になって想い出し胸が痛

む。

古い家で育った主人にしてみれば家の歴史が投げられる様な思いであったのでしょう。

西部に育った人は古いしきたりに愛想をつかせながらも、西部を愛し、そこから離れ難い気持で生活して来た人が多いと思う。

良き伴侶だったその主人が若くして世を去った。両親を愛した夫、家を大切にしたい夫、その夫亡き後急に私の上に「家」という重みがのしかかってきた。舅が常に口にしていた三代目を事実上引き継ぐ事になってしまった。

三人の子供を残され、大黒柱を失った私は、明日の生活より、この家をどうしよう、のれんはどう、何とか家を守り先祖や夫の意志を子供達に伝えていかねばと、とうとう家の嫁になってしまった自分に誇りさえ思うのは不思議である。

その様な事情のもと、明治初年、花札製造元から贈られた看板の名前をそのままとって、すなわ「花かるた」の今の店の誕生である。

家の造りもそのまま生かした。廻りの人達には反対された。新しい物を造るより資本はかかるし、何せ水商売を開く様な場所ではないし、私がズブの素人である事も反対の理由である。しかし、家の歴史と共に生活できるし、のれんも守れるし、何よりも子供と同じ屋根の下で仕事出来るの



で、子供に淋しい思いをさせないで済むと思う事が一番であった。現代の生活の中で、古い物を守り、それを生活に生かして行くのはある意味で大変贅沢な事なのかも知れません。

問題点を沢山かかえた私の店造りでしたが、今は店のお客さんもふえ、やって良かったと思っています。

今後は明るく楽しい店、皆さんが心の安らぐ西部の町並みを感じる様な店造りに専念したいと思っています。

ユニオン・スクエアでの営業に誇り

村 岡 武 司

私のちっぽけなスーパーマーケット「かもめの水兵さん」が開店して一年を越える事が出来ました。しかし、ふりかえってみると実に多くの事件が発生した一年間でしたが、なにはともあれ当面は営業を続ける事の方がより重大な事だと思っています。これは私のみならず同じ船に乗り合わせた仲間が建物「ユニオン・スクエア」の活性化に未来への希望を見出し、営業を通じて目的を遂行しようとしたという点では同じ気持ちだったと思います。

文化人商法の破綻。町並保存運動の挫折などと表現されると、やはり駄目だったかという絶望感に支配されてしまいます。

然し、忘れてもらいたくないのは、今我々が営業を続けているという事実です。そして肝心なのは、この建物がどこにあるかという問題よりも、古い建物が生き返ったか否かにあるのであり、どう生かしているかにあるのではないかと思います。

根底にあるのは、当初の目的に賛同して入居したテナントが営業を続けているか否かの問題ではないかと思うのです。テナントの営業も全て失敗に終り、住人はもとのハトポッポだけになったというならナルホド立派な失敗です。然し我々の営業が継続し、多くの市民、観光客を集め、相当の評価を受け、その対価として、いさゝかの収益を上げ、当面の管理者に家賃を支払っているのです。

手前味噌でいさゝか言い難い点ですが以上のような我々の日々の継続した営業活動こそが、活性化そのものであり、町並み保存運動の本来の目的だったのではないのでしょうか。かけ声をかける事、評論すること、あるいは所有する事そのものはたいして意味のない事であり、ましてや「目的」ではなかったと思います。所有することだけが大切なのなら、今後は不動産業の勉強に励むことです。

ガラス工房を始め、レストラン、布地の店・ジャンクショップ、宝石店、照明器具の店、ブティック、カフェバー等々、主義主張を明確に打ち出して実に健気に頑張っていると思いませんか。

その結果だと思いたいのですが、西武流通グループの堤清治氏や、北海道知事の横路氏の来訪を受けたり商店建築、日経アーキテクチャ等の専門誌に広く紹介された、あるいはNHK、各民放のTV、雑誌、新聞の取材はほとんど連日といっても良いくらいです。

市民、観光客の来館も大巾に増え、私の小さな店も8月は、前年の倍のお客様が来てくれました。そしてそれ等の方々全てが口にするのは非常に素晴らしい空間であり、青山、六本木、あるいは横浜、神戸の水準をはるかに越えるものである事を感嘆とともに認めています。

現在この素晴らしい空間の「所有」を巡って係争中なのは、ご存知のとうりです。

「所有」については関心無しとは言え、決して良い事とは思っていません。私達が営業のみに専念出来るように、又この空間が元のハト小舎にもどってしまわないためにも、もっともっと多勢の方々の力を必要とします。

これだけ全国的な評価を得始めた建物は今や市民共通の財産ではないかと思えます。

特に行政にあっては、高見の見物では何物も育たない事を思い返してみる必要があり、あえて火中の栗をひろう勇氣を持たれる事を期待いたします。

紙数も尽きました、最後になりましたが私はこのような素晴らしい空間で営業する誇りを与えてくれた大河内、伊丹の両氏に最大の賛辞をこめ、「ありがとう」と申し上げる次第です。



(永田史明氏撮映)

東 欧 の 旅 か ら

古 川 満 寿 子

ワルシャワの飛行場からホテルへの道は緑に覆われ、70米の道巾は歩道も車道も実に広々と感じられる。日本より少し小さな信号機の他は交通標識の類もほとんどなく、早朝出勤らしい人々がのんびり歩いていた。

ホテルの横にレンガの壁にはめこまれ紅白の幕で飾られた石碑があった。石碑は月桂樹の花輪で縁どられ何かとても由緒のある記念碑に見えた。しかしその前には生花がたくさん置かれ、夏の日射しにしておかれた花もあり、日本の墓地を思わせる人間くさい生々しい悲しみが漂っていた。それがあの抵抗運動の市街戦で倒れた無名戦士の碑であった。これはワルシャワの街に出てみると随所に見られ、どこも生花が絶えないようだ。

戦争で破壊つくされた瓦礫の下からまず市民が始めたのは町並の復元だったそうだ。一人一人がレンガを積み、石畳を敷き、壁の落書きまで元通りにし、古さを出すため劇薬で壁を腐蝕までさせ、過去の遺産を未来へ引き継ごうとしたワルシャワ市民の執念の一つがザムコウビイ広場から旧市街への通りである。



ワルシャワ旧市街

そこは一瞬中世の城下街に迷い込んだような錯覚を持たせるが、通りの両側の古い建物には、生活の臭いが満ちていた。城壁のように石畳の道を囲んでいる建物の1階は喫茶店や事務所、小物売る店等に使われ2階以上はアパートになっているらしく、カーテンの陰から女の子の顔が覗き、いたずら猫を追いかけて肥ったおばさんが手をふりあげて通りをかけ出してきた。

旧市街と新市街を仕切るバルバカン城壁の先がくずれたまま残っているのをみて、ここは戦場だったんだと思い出すくらい旧さと新しさがみごとに調和していた。

ポーランドの悲劇のもう一つの象徴、ゲットー広場

を見た。アウシビッツに送られる為に集められたユダヤ人の収容所跡である。今も収容所前の大木にはそこに連れていかれた人々の名前を書いた新しい紙が花のようにはられていた。

近くの広場

にはナチスに最後の抵抗を試みたユダヤ人の像が、ヒトラーの像を建てる予定だった所に厳と建っていた。

ハンガリーのブタペストは美しい街だった。遅く着いたレストランで甘く切なくどこか陽気なジプシー音楽とワインに酔いドナウ川の辺りのホテルに入ったのは夜の十時過ぎ。部屋の窓から川向うにブタ城がほの青く浮きあがり暗やみにチェーンブリッジの照明が孤を描いているのが美しく見られた。丘の上にあるブタの宮殿は戦争で破壊された後、特別復興委員会を作り充分に検討された中で現在のように復興されたそうだ。ネオバロック様式の宮殿は現在博物館や美術館になっている。漁夫がここで王城を守ったという漁夫の砦からは川向うのペスト地区の国会議事堂などが水面に映りとても美しく見えた。ここにヒルトンホテルがあるが、景観を壊さないように作るという条件で何度も設計をやり直させ、今は古い城壁の一部をホテルのデザインの中にそのまま(朽ちかけた壁の形で)組みこんでやっと承認され完成したそうだ。ブタペストの街の中に建物を新たに建てるには、景観を壊さない為の非常に厳しい規則があり、高層ビルなどは建てる事ができなくなっていると聞き、並とは単に景観ではなく市民の心の象徴だと痛感させられた。

ポーランド、ハンガリーの古い城や教会は、それができあがるまでに百年単位の月日がかかり、それらが破壊されたり古くなって壊れた時は修復に10年単位の時間をかけてじっくり元の形に再現しているという姿勢に、物が豊かな日本人の文化に対する心の貧しさに恥じいった旅だった。



ワルシャワ旧市街

外人墓地

当 作 守 夫

函館は、1854年、300年守り続けた鎖国が開かれた時、世界に向かって最初に開かれた港であった。

爾来、多くの外国船が当港に出入し、町は外国人が居留し、西洋の文物がいろいろ入ってきて、日本の近代化の窓口となった。

外人墓地の嚆矢は、1854年正月、信書の回答を求めて再来した米国の使節ペリー提督が3月、神奈川条約を結んで、翌年3月から箱館が開港されることになったので、その下見のために艦隊を率いて、4月15日に箱館に入港した。碇泊中、松前藩と折衝をするかたわら、港内の測量や学術的調査を行い、5月8日、下田に向かって出港したので、その滞在は僅か20数日であったが、その間にバンダリア号乗組の2水兵が死亡したので、許可を得て山背泊に埋葬したことにある。

その後、1870年、開拓使函館出張所が函館に駐在していた米、英、露など5か国の領事と協議して、この地を外人墓地として正式に定めたものである。

外人墓地は、プロテスタント墓地、ロシア人墓地と中華山荘（中国人の寺と墓地）の3カ所を総称するが、一般にはプロテスタント墓地とロシア人墓地の欧米人に所属する墓地を呼んでいるようである。

墓地の管理は、プロテスタント墓地は長い間英国領事館が、ロシア人墓地はロシア領事館が当たっていたが、英露両国領事館の閉鎖などのため、1936年以降は函館市が管理することになったが、ロシア人墓地は従来の関係上函館ハリストス正教会が管理を委託されている。横浜、神戸、長崎のように多くの外国人の居留していた古くからの開港場を除いては、100年以上もむかしの墓がこれほどたくさんある所は珍らしく、世界史の中の日本を知るには欠かすことのできない所である。

◎プロテスタント墓地

白い鉄柵に囲まれた海沿いの墓地だが、正門は海側にある。

現在、41基残っているが、全然文字の無いものが2基ある。埋葬者の数は、2名の姓名が誌されたものが

1基、記念碑で埋葬されていないと思われるものも1基あるので、実数は40名であろう。

また、木製の墓碑が朽ち果てて永遠の眠りについている人々も数名いるようであり、1855年フランス軍艦の6名の死亡水兵もここに埋葬されていると推測されるので、少なくとも50余名は埋葬されているだろう。埋葬されている人々の性別は、大人、男30名、女3名、不明1名、子ども、女5名、性別不明2名で、職業別では領事3名、商業8名、海軍々人9名、船員7名、宣教師1名で、海事関係者が圧倒的に多い。国籍別ではイギリス人が17名で最も多く、ついでドイツ人7名、アメリカ人5名で、イタリア人、デンマーク人、ポルトガル人、ノルウェー人が各1名で、不明が8名となっている。



年令は、最高88才で最低は乳児の63日である。

埋葬された年代は、明治以前8名、明治年代27名、大正年代4名で、昭和年代は1名もなく、ほとんどが明治年代である。

1854年、ペリー艦隊の来航のさい、港内で死亡した2人の水兵ウルフ、レミックの墓、1875年旧秋田藩士田崎秀親の凶刃に倒れたドイツ代理領事ハーバーの墓、1864年、来函32日目で若い夫人と2人の幼児を残して37才で夭折したポルトガル領事ケースの墓20余年函館で活躍し、1889年、脳溢血で死亡したデンマーク領事デュースの墓と、3人の領事の墓があるのも全国の外人墓地でも珍らしい。

明治初期、函館を中心に活躍したイギリス商人ブラキストンの共同経営者マー、シロタの名で親しまれた好色な男、雇い入れた女性としばしば問題を起し、コレラに感染して死亡したシェロター、造船業のトムソン、屠殺業で外国船へ肉を販売していたビュウィック、イギリス紳士の典型で乗馬を日課としていたウイルソン、機械工場、製氷工場を経営していたスコット、宣教師で、遺愛幼稚園長をしていたグッドイン女史らの墓がある。

この墓地の中に、秘密結社フリー・メーソンの記章のついた墓が4基あり、死亡者が同結社の会員であっ

たことを示している。フリー・メーソンの起源はよく分らないが、14世紀頃イギリスの石工組合（オペラチフ）によって作られたものらしく、その記章はコンパスと定規を組合せ、中に定紋のGが付されている。生前は会員であることを家族はもとより、法廷の場でも明かすことを堅く禁じられている会員記章を、死後になって堂々と墓碑に付されるということは、私たちには理解のできない謎というほかない。

◎ロシア人墓地

山側の白い鉄柵に囲れた約1650平方メートルの墓地である。

1859年6月に葬られたものが1番古く、旧ロシア人（帝政時代のロシア人）27名、サンドウィッチ島の土人1名、白系露人7名、日本人8名、合せて43名が葬られている。

木の墓標の朽ち果てているものもあるらしく、この墓跡は見当らない。また、元町の旧聖堂の構内から発見されたという初代のロシア領事ゴスケウイチの夫人の遺骨もここに移葬されたが、その場所は今も分らない。

この墓地の墓の形式は、ほとんどロシア風のカマボコ型の墓石を頭の方を高くして横伏せにしたもので、単純なものが多いが、たゞ大きな自然石を利用した合葬墓石が異彩を放っているのみである。

1866年以前のものは、当時ロシア領事館の警衛のために港内に碇泊中に死亡した海軍々人のものであり、これに関する資料はない。また、これらの墓碑の年号はみなロシア暦が使われており、太陽暦とは12日のずれがある。

旧ロシア人の25名は全部露国海軍の軍人で士官3名、水兵22名で、年令は最高44才、最低は24才で、女は1人だけである。

白系露人は、男4名、女3名で、ほとんど昭和年間の死者で、大正年代が1名だけである。

日本人は、男3名、女3名、不明2名で、みな明治年代のものである。

ギリシャ正教の十字架は、他のキリスト教のものとは異なり、十字架の縦木の上部と下部にそれぞれ横板のついたルシアン・クロスと呼ばれるものである。上部の小さな横板は捨札といひ、生前の罪名を記したもので、下部の横板は左側を上斜めについているが、礫されるときの足台となるものである。

この墓地には、ロシア領事館付属聖堂の読経者で、ロシア語学校の教師で脳溢血で死亡し、北海道最初の病理解剖をうけたサルトフ初代ロシア領事ゴスケウ

イチの夫人、白系ロシア人で漁業家のデンビーとその一族、商用で上海で旅行中死亡したバトーリン、1939年、スパイ容疑で上海に銃殺されたルドミラ・チェリー夫人の墓もある。

高さ4m周囲8mの自然石の大きな墓は2名の合葬墓で、1862年、海防艦ポサドニック号乗組の少尉候補生ポポフと水兵ゴサコフを祝ったものである。

墓地の中央に小礼拝堂があり、チャソニアと呼ばれそれほど古いものではないが、むかしは堂の中にイコノス（聖画）も飾られ、立派なものでもあったが、今は空堂となっている。

◎中華山荘

赤い煉瓦塀に囲まれた中国人の墓地で、正門は海側にあり、中華山荘と中華義塚の2枚の筆太の門標が掲げられている。

中華山荘は、中国人の経済力の強さを示した総檜造りの大変立派な堂であるが、日本の寺院の内陣に当るものはない。



塀の内部には10基ばかりの墓石があり、古いものでは1868年のものがあるが、中国人の慣習として死者は生れ故郷に埋葬しなすので、ここには僅かしかない。たゞ木碑だけのものも10基ある。又、ペリー艦隊の通訳として来函した羅森を記念する碑が建てられている。

堂の裏手にある大きな石塔には中華義塚と彫られており、この堂の中心をなしており、光緒3年(1877)の銘がある。

義塚というのは、本来共同墓地とか無縁仏のことをいうのだが、この墓地の中では1番大きい石碑である。

また、墓地の右隅に葬儀や祭の時に供える模造紙幣を焼く炉がある。春分のあと15日目にあたる日を清明というが、むかしは爆竹を焚くなど大変賑やかに祝ったが、その時に模造紙幣を焼き、亡くなった人に銭を持たせるとしている。

（元函館市公民館館長）

〈写真ははこだて歴史散歩より〉

宿場の木曾路を行く

岡 田 溪 子

この1月に母が逝った。永平寺納骨の帰り途、かの「夜明け前」の舞台となった木曾路へと足を延ばした。この作品の読後、母と行ってみたいと話しかけたことがあったので、私にとってこの木曾巡りは、母のはからいのようにも思えた。

高山線を南下し、木曾路へのバスに乗り継ぐべく下呂駅に下車。バス待ちの合間に街を散策する。岨伝いに通う道。谷側の家々は、玄関こそ路面に続いているが、土台を支えている礎石は数メートル下の谷間とあって一驚する。家は太い木材や鉄パイプの林の上。言ってみれば揚げ床なのである。こうしたその土地の自然に根づいた住まいの生きざまにじかに触れることのできるのも、旅の楽しみの一つである。

馬籠に着く。石垣を築いてつくった平地の上に立つこの馬籠の宿は、由緒ある大きな構えの家並みが続く石畳の急坂をあえぎ上ると、やがて左手に黒塗りの冠木門の藤村記念館が見えてくる。復元したというこの門と、ただ一つ焼け残ったという隠居所のほかには、面影を留める建物はない。しかも白漆喰塗りの回廊式記念堂が敷地右側に細長く延び、藤村ゆかりの資料を蔵する文庫は奥庭の土蔵跡に建てられていて、本陣跡は、礎石を点在させた砂地の広場空間として、筍目も鮮やかに残されているだけである。しかしそこに立つと隠居所下へ通ずる石段、恵那山への山並みが見通されてむしろその空間の中に歴史の余情が漂っているように思えてくるのである。

この記念館で「藤村いろは歌留多」を目にした。㊦犬も道を知る、㊧なんにも知らない馬鹿、何もかも知ってる馬鹿……ユーモラスな藤村の寸句と、岡本一平の飄々として簡略化されたタッチの絵からなるこの歌留多は、赤布の帙に納められた復刻版であった。このお二人の取り合わせがまた妙である。藤村夫人冬子が函館の出であることはよく知られているが、岡本一平自身も函館の生まれである。昭和三年再婚後の藤村の足は函館から遠のいたといわれるが、この歌留多の箱の奥付には「大正16年1月5日発行 金八銭」とある。二人を結びつけたものがあるいは函館という地縁でもあったのだろうかなどと思い巡らしながらこれを買って求めたのだった。

妻籠は既に暮色が立ちこめていた。バス停だけの国道を折れて中山道に入る。なんとひなびたたずまいであろう。宿場特有の手すりのある二階屋が裏山の緑を背景に、障子と壁の白さをきわ立たせて、さび茶色



(冠木門の藤村記念館前)

の木肌の軒を連ねて続いている。

文化文政間の宿場景観を基準に、村全体の復元を計ることによって過疎の村から回生に踏み切ったというこの村は、伝統的建造物群保存地区に指定されて年間60万の観光客を集めているという。黒塗りの郵便箱、要所要所に配置された防火用材箱「火の要鎮」などきめの細かい行政の配慮と、そして土産の品種や家業を分担し、旅客を融通し合う、統一された住民の意志の強さが、この村ぐるみの保存を支えているのであろうか。

S氏の案内でたそがれの旧街道を行く。そして宿場とはまさしく旅人のための砦であったことに気づいた。木曾路はすべて山の中。岨伝いのこの一本の街道を、旅人も、そしてその刺客も通らざるを得なかった。宿場の両端にあったという枳形のほか、現在もそのまま保存されて資料館として公開されている脇本陣奥谷家にある密室は、家人の寝室の奥の仏壇のかげにある壁の間の空間ともいうべき部屋である。客人の安全を体を張って守ったこともあったであろう歴史の一コマを、この山峡の遺構は無言の中に語っていた。

間口を決められている家々の奥行は深く、背後の山から流れ落ちる清水は竈に引かれて床下を洗う。せき止められて鯉の養殖をしているとも聞く。その夜の食膳は鯉のあらいと、半日も煮込んだという鯉の甘露煮。それに山菜の数々。心のこもった山家料理であった。相客の間に、この妻籠を愛でる連帯の心が通じ合い、一しきり賑わう。「団体旅行は嫌いです。本当に見たいところだけをじっくりと旅をしたいです。」としんみり語る初老夫婦の満足げな笑顔が心に残った。

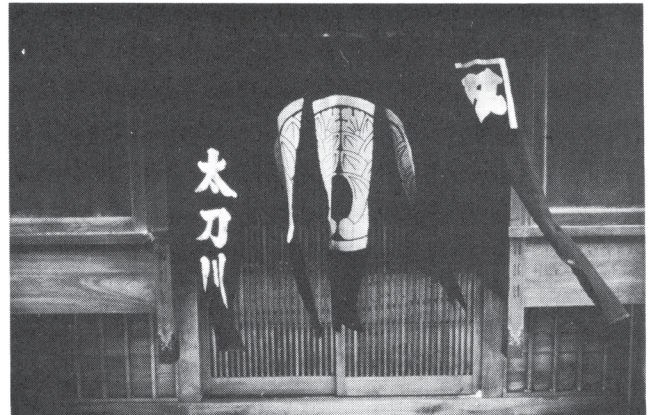
文化財の保存とは、遺構をもってそこに生きた人間の歴史を語り伝えることでありたいと、改めてそんな思いがした。

「スライドづくりを終えて」

永 田 史 明

3年余りに亘るスライドづくりの仕事を終えて、ともかく肩の荷がおりたという所ですが、この仕事に御協力いただいた方々、本当に有難うございました。この仕事は、私の人生にとってもいろいろな意味で忘れられない一つとなると思います。 たまたま立寄った函館に、この仕事を依頼された事で、すでに4年半も住むことになったのです。

そして、この間いろいろありました。函館の状況も転換期という事もあって、大きく揺れ、歴風会も又、その中でその存在や内容を問われもした気がします。このスライドが、今後どんな形で生きて行くかは、わかりませんが、一応世に出た今、様々な評価を直接、間接耳にしています。私自身もそれらに対し言いた事がありますが、それはそれとして、今後のために生かして行く様、心に留めておけば、今は良いと思っています。それよりも、函館で、今までに、この種の物に目を向けられていなかった事の方が、問題ではなかったかと、私は思っています。私が、この仕事を受けて間もなく、町並ゼミが当地で開かれ、当会でも古建築番付をつくったりしたのですが、私の感じたのは、函館の人は案外函館の建物を見てないという事でした。観光的な有名建築は別として、歴風会の人も、建築関係の人も、その点では同じでした。特に一般民家に関しては、無関心というか、外形的な町並み程度のとらえ方しかされてないのは、今も余り変わらない様です。今でこそ、町並調査報告もなされていますが、それさえ、当時やっと始まったばかりでした。ですから、この仕事をすすめるに際し、全くの手さぐり状態ではありました。もちろん、新参者の私より、皆様は、函館を知っておられたはずですが、何となく、観光者と同じ様な、ハイカラな町や家位の気持で見えおられるだけであって、学習的な知識はいくらか先行していたとしても、そんな自分の町の家やその周辺環境の背後に存在する、それらをつくっているものまでをも見つめたり、感じたりしておられる人は、まず居なかったと思います。知らず知らずの内に、建て替えや改築されている、それらと共に、その中にある大切なものまでもが、消えて行くのではとの気持から、私はまず残っている民家とその周辺を通じ、それらをつくっている大切なものをどうにか伝えたいと思ったのです。客観的な町並調査等も、理論的にそれらを報告してくれるでしょうが、そんな知識と同時に、体験を通じた、感



覚的なイメージとしてしか伝えられないような、民家やその周辺が持っている情緒的なものもあるのです。その辺をより認識してもらいたく、敢て音と映像だけという形式もとったのですが。歴史的な町並や民家の重要性は、永年選りすぐられた物に対する私達の共有できるイメージ、心理がぼんやりと、又、間合いとか呼吸とか、はっきりとした形にならないパターンとしてその中に存在しているからで、それが私達の情緒的なベースとして伝承されて来たからこそ、それら古い町並には統一感があり、ふるさとをも感じるのだと思うのですが、今の私達はそれを見失っているのではないかと。だから、私は、表面的な形の差異よりも、それらに共通して流れているベースになるものに興味があります。それは、風土により、歴史によって姿、形を変えているに過ぎないからです。物として残して行くのも一つの方法ですが、概念として伝えて行く事もまた必要になって来るでしょう。全てを残す事が不可能なこれから、新築・改築にあたり、新旧の調和もそれなくしては計れないからです。そして、これは函館だけのテーマではないのです。

こちらへ来る前に、幾らかでも、そんなテーマに携わって来た私に、期待された理由も、ここに在ったようです。又、私が仕事にならない仕事として受けたのも少しでも何かその手助けになればと思ったからです。そして、函館は歴史的にも、様々な建築や文化を逆に生かして、混在調和してきた町ですから、ここで又、古今の調和した家や町の魁となって欲しかったからで、それだけの対象も、膨大に残っていて、全国的にも一番その可能性ある町だと思うからです。そんな気持から、今回のスライドで、私はイメージとして函館の民家やその周辺にある大切なものを伝えようと思ったのです。

そして、その効果という点では、即断出来ないと思
いますし、まず、それらを素直に見直し、一番大切な

原理は何かを考え、感じてもらうきっかけにでもなれ
ばと、気軽に思う位が無難かもしれません。

「史的環境保全と地域計画」

村 井 雄 二 郎

「開発とか近代化の美名のもとに、私たちが受継い
だ遺産を次ぎつぎと破壊し、町の個性を失わせること
が、本当に町の発展になるのでしょうか…」と、9月
19日、函館市民会館で学習会が開かれた。

主催は『景観と開発を考える実行委』。講師は奥平
教授、小笠原忠久氏、宗像英雄氏の3氏で、演題はそ
れぞれ「景観保全と湾岸道路」、「埋蔵文化財と新外
環状線」それに「自然保護と周遊道路」であった。

どの問題も、沈滞する函館の活性化の起爆剤と見る
人が多いだけに市民の関心と呼んだようで、80人程
が集り、質疑も盛んであった。

学習会はず、石川実行委員長の文化を育んだ年月
を忘れるべきではない、とケンブリッジ大学の芝生の
例を引きあいに出した挨拶ではじまった。

50年代の企画で、既に第一工区の橋脚工事が終わ
っている「湾岸道路」は、当初の意義が薄れた現状か
ら見て速やかな計画の変更がせまれ、更に景観保全
の面からみても問題、と奥平教授。

次に「新外環状線」は各所にある遺跡などの破壊に
つながる、とスライドを交えながら考古学協会の小
笠原氏。

最後が、諸般の事情から中止したはずの函館山の周
遊道路の再熱はおかしいと宗像氏。

学習会ということで講演終了後、質疑が活発に行な
われた。

不況の中での開発、道路建設等では、幾らかでも経
済的な利点があるのでは、という素朴な質問。

先ほど指定のテクノポリスをどうみるのかと講演者
に聞く人もあり、またヨーロッパの都市では、数百年
を単位とした計画の中での町並が見られる等と意見を
のべた人もある。「湾岸道路」は予算化されれば直ぐ
にでも工事が流行されるという市議もいた。

これは函館港の貨物取扱量が将来増加するという想
定を元にした計画であったが、函館ドックの衰退、連
絡船等の貨物減、西部地区の交通量等がのびず、道路
の新設は意味を持たなくなっているのが現状でもある。

加えて西部地区の歴史的景観保存の意味からも問題
になるのでは何をか言わんやといえようか。

内容を詳しく見ると問題がいろいろある。四車線の
筈が「暫定二車線」とかになったのはどうしてか。当
初の計画を変更したのは、既に利用度の減少が見込ま
れたのではなかろうか。

それならもう一步進めて計画の再検討を図るべきで
はなかったか。ほとんどが高架道で湾岸に建造し、西
部の倉庫群のあたりは埋立てし地下に潜り、ドックが
起点となるという。

観光客の間でも人気のある、あの旅情をたたえた七
財橋と赤レンガの倉庫群の景観も消える。わずかに残
っている歴史的な船入間も同様で、このあたりは小樽
運河と運命を共にするようだ。

100億もの国費と市費をつかい、観光の目玉とも
言うべき景観を損ねて一体、わが「はこだて」に何を
もたらすのか。

ほとんどが国費だからという自治体の貧しい根性がみ
えるようだが、それとて、ごく一部の土建業者を潤し
ているだけであろう。それとも目的が別にあるのだろ
うか。この計画と連絡船の廃止問題がどう結びつくの
だろうか。高速道路の上でカラスが遊ぶような光景は
函館市民の一人として見たくないものである。

是非メンツを捨てて再検討を望みたい。

「新外環状線」は現在の産業道路の外側に大きく取
囲む形で道路を作ろうというのだが、各所に点在する
遺跡の調査及び保存をどうするか。

遺跡を避けてもその周辺の宅地造成のため破壊の方
がより問題といえそうだ。

遺跡と開発はいつも古く、そして新しい問題である。

遺跡の破壊はそこに住む人々に取ってただちに害に
なるものではない。それどころか何千年も前の人間の
痕跡など、今食べていくためには何の足しにもならな
いと考え人もいる。いや保存を考える人より圧倒的
に多いかも知れぬ。

広い視野にたてば住民に損害であっても、破壊の時
点では分らない。それより開発という目の利益に引
かれるのであろうか。

保存が開発の一部という観点にたった、マスタープ
ランが是非欲しいところである。

しかし今の函館に問題なのは、この環状線を作るこ
とによって、更に都市のスプロール化(不規則な市街

のバラバラ現象)がすみ、都心のスラム化につながる恐れがあるのだ。

かつての繁華街である西部地区のごとく、駅前地区が廃れていくのは目にみえているではないか。しかも都心の移動は決して人口の増加につながらないのである。ただ、狭いお盆のなかで、アチラコチラと移動しているだけである。この点で市当局も松風町界隈の商店街の人達は一体どう考えておられるのだろうか。

駅前再開発の問題もたち消え、連絡船の廃止問題にも身を持って抵抗するのではなければ、駅前そのものが消滅するのではなからうか。この「新外環状線」はその様な意味があることを知って戴きたいものである。

さて次は「函館山周遊道路」だが、矢野市政時代に既に結論が出ているのに、またぞろ亡霊のごとくまかりでてきた。

明治期から昭和の敗戦まで要塞地帯として一般人の登山が阻まれて来たため、偶然、動植物が一種の聖域として守られてきた。またブラキストン・ラインとして歴史的意義を持つ函館山。

山頂からの夜景は世界一とも言われるので、この330 ㍎程の山に市当局や観光業者が目をつけるのは当然でもある。ただでさえ目玉商品が不足している函館だ、アイデア不足とはいえそれほど責められまい。

しかし「周遊道路」さえ出来ると、頂上まで5時間もかかったなどといわれる今年の夏のような状態が解決すると思っているのだろうか。

猫の額程の山頂の駐車場問題が解決されない限り、

事務局だより

★5月27日の59年度総会において今田会長が再任、夫々役員が委嘱され運営に当たっております。皆様の一層のご支援をお願いします。なお会に対するご意見、町並み情報などがありましたら下記の者へお寄せいただければ幸いです。

会 長 今田光夫 事務局長 工藤光雄
副 会 長 大野和雄 奥平忠志 落合治彦 田尻聡子 浜島国四郎 (アイウエオ順)
監 事 中村金兵衛 藤田 郁
運営委員 会田金吾 上貞幸丕 加賀谷京子 笠間昭三 佐々木正子 佐渡谷安津夫 清野恒夫 進藤春水 高瀬則彦 豊山孝雄 永田史明 西野鷹志 浜田昌夫 古川満寿子 宮本十三日 宮本寿子 (アイウエオ順)

★5月27日総会終了後 函館大学教授(当会副会長)大野和雄先生の「フランスで考えた都市づくりの智慧」と題する特別講演をいただきました。スライドを使っ

ての示唆に富むお話でした。

★7月9日 建築雑考の会との共催で音と映像によ

スムーズなドライブ・ウェイにはならないのではない

か。頂に穴を掘って駐車ビルを埋めればよい、などという人もいる。アイデアはけっこうだが実現不可能であろう。

なにより問題なのは、何がなんでも車で上ろうとするその考えを変えるべきではないのか。函館山には自家用車では上れないもの、と思えばどうなのか。バスもありロープ・ウェイもあるではないか。全国公園問題コンサルタントなども、この山は現状より開発を進めるべきではないと結論づけている。

山の植生を守り、後代に残すのも、現代人の責務である。まして意味のない「周遊道路」建設で山を破壊するなんて、わが身を食らうタコみたいなものであろう。

うがった消息通の話では、いやあれは実現不可能なことは分かっているのだが、市当局が約束したはずの山麓駐車場を作らないので、いわばその催促みたいなものだという。

それが本当としたら愚かしい極みというべきか。

以上のごとく、この度の「学習会」は函館の抱える開発に関して将来にかけての重要問題を取上げた。

「新外環状線」等は今年のうちにも決定を見るという。将来の命運を分けるともいえそうな計画が、余り市民が知識を持たない内に決定されるのはどうもおかしいのではなからうか。当局は元より議員の方々も、PR不足の観があるようだ。ジャーナリズムも、問題点をするどい視野でえぐりだしてもらいたいものである。＝当初歴風会主催で計画された学習会でした＝

るスライド上映会を市民会館で催しました。テーマは＝函館のまちと家・そのイメージの伝承＝これは恒例のチャリティーの益金の一部を当てスライド作製を雑考の会へ依頼したものです。大変好評でアチコチからひきあひもあります。上映希望の方は申し出下さい。永田さんはじめ雑考の会のご苦労とご協力へ感謝します。

★7月22日 外人墓地とその周辺を訪ねてを実施しました。当作守夫先生より懇切丁寧なご案内説明を頂き感謝しております。

★7月23日講演会をしました。21世紀の函館を考えると題して東邦生命保険会社社長太田新太郎氏と当会会長今田光夫氏の講演で多勢の参加者をみました。

★9月9日第5回ふるさと写生野外展をライオンズクラブ共催でしたが荒天となり途中で中止しました関係者と協議の結果、今回は作品募集に切り替えました。9月27日募集締切、審査9月29日、入賞作品展覧会10月8日～13日文雅堂、表彰式13日文雅堂です。

★会費納入のお願い 58年59年度未納の方何卒ご協力をお願いします。郵便振替一函館630一又は拓銀昭和通り支店026-293-407宛先は函館の歴史的風土を守る会住所は千代台町20-18です。